

はじめに

今から半世紀ほど前に、指導の基本技術に再検討を加える目的で執筆された著書の中で、田崎（1969）は基本的な指導技術の貧弱さに触れ、以下のように指摘しています。この状況は約50年を経た今も変わらぬように感じられます。

おまけに1度1人前の教師としてスタートしたが最後、誰も本気で苦言を呈してくれる人はいない。しかも基本的な指導技術の不足をかかって参考書を探しても、そういうことにふれたものが案外見当たらない。（略）これはひとつには、「技術」を「小手先のことがら」として次元の低いものと考えがちな傾向にあることと、もうひとつには、技術があまりにも日常茶飯事のことなので、当然分かってきつたこととしてふりかえらぬことにその原因があると思われる。

（田崎清忠（1969）『英語指導技術 理論と実践』大修館書店、「序」より）

本書はこれから英語教育に携わろうとしている英語教師志望者、日々実践を重ねながら積極的に授業改善に臨んでいる若い英語教師を讀者として想定し執筆しました。主な内容は、これまでの筆者の教育実践をもとにしながら、授業を構築する際の要となる「教材研究」の方法について、教科書にある英文を例にとり、「実践」と結びつけながら具体的に解説しました。

執筆の最大の理由は、学習指導案に記される「単元観（指導を行うためにその単元を選択した理由）」や「指導観（その単元で行うのに適切であると判断した指導）」と、実際に行われる授業内容との乖離を研究授業や公開授業を通して感じるが多かったからです。

昨今は、新しい学習指導要領の実施にあたり、「アクティブ・ラーニング」「主体的・対話的で深い学び」などのキーワードに触れることが多く、書店においてもこれらのキーワードを含む関連書籍を多く見かけます。熱心な教師ほどこうした教育の流れに敏感で、英語教師を対象とした様々な研修会に参加したり、新刊書で気になる書籍があれば購入したりと自己の研鑽にいそしんでいます。しかしながら、「明日から使える」「絶対成功する」などの刺激的な言葉

とは裏腹に、実際に自分の授業で応用してみても思い描いたような授業にはならず、自信を失ってしまうようなことがあるのではないのでしょうか。

もちろん、著者の指導履歴という文脈を無視して、指導技術だけを盗もうとしても無理があり、授業が空回りしてしまうのは止む無しなのです。しかし、原因はそれだけでしょうか。指導履歴までをまねできなかったことが問題なのでしょうか。

実は、優れた教育実践の背景には必ずしっかりと「教材研究」があります。授業の良し悪しは、学習指導案の「単元観」「指導観」「生徒観」を読めば分かります。それらは実践の背景にある指導の履歴や教材研究の深さを写す鏡なのです。

筆者が「教材研究」という言葉を初めて耳にしたのは、大学で教科教育法を学んだ時でした。そして、大学の附属学校における教育実習では「教材研究」の奥深さと面白さを学び、その後附属学校に指導者として赴任してからは、多くの教育実習生と接する中で「教材研究」の大切さについて改めて学ぶことができました。

「教材研究」は授業の奥行を左右します。「教材研究」が深まれば、生徒の学習も深まります。これからの英語教育を支えていく方たちにとって本書が少しでも役に立つのであれば、これに代わる喜びはありません。

2021年4月

著 者

若い英語教師のための教材研究入門

目 次

はじめに	i
第1章 「教材研究」とは何か	1
1. 「教材の吟味」と「教材の解釈」そして「指導方法の検討」	1
1.1. 「過去進行形」をどう指導するか？	1
1.2. 「やり取り」のモデルとして教科書を検討する	7
1.3. 「予習」と「教材研究」	10
2. 学習指導案の「単元観」「生徒観」「指導観」には何を書くのか	16
3. まとめ	20
コラム① 「まあ、こんなもんかいのう」	23
第2章 「発問」とは何か	25
1. 「発問」と「質問」	26
2. 英語リーディング指導における「発問」のタイプ	28
2.1. “Display Questions” と “Referential Questions”	28
2.2. 生徒が主体的に教材に向かうために	31
3. 「ごんぎつね」の授業実践に学ぶ 「教材研究の在り方」と「発問」づくり	34
4. まとめ	38
コラム② 「学習指導案」は盛らない —目の前の生徒が見えていますか？—	41
第3章 教材の吟味—テキストタイプ—	43
1. 学習指導要領が示すテキストと言語活動	44
2. 複数の領域を統合する理由	48
3. テキストタイプ	52
4. テキストタイプに応じた領域を統合した指導の計画	54
5. まとめ	58
コラム③ 「主体的に学習に取り組む態度」の「主体的に」の意味	59
第4章 「指導目標」の設定と「指導計画」の作成	61
1. 指導目標	61
2. 言語活動と指導の区別	63
3. 指導目標の設定	65
4. 指導計画作成上の留意点	71
5. まとめ	73

コラム④ 「目標」と「責任」	79
第5章 説明文の指導	81
1. どんな力をつけるのか	82
2. 説明文の視点①— Topic, Topic Sentence & Main Idea —	83
2.1. Topic 83	
2.2. Topic Sentence & Main Idea 85	
3. 説明文の視点②—段落 (Paragraph) の構造—	88
4. まとめ	93
コラム⑤ 教師の授業参観は教室前方から	96
第6章 説明文を用いた指導の実際	99
1. Pre-reading 活動の指導例—事前の語彙指導—	100
2. While-reading 活動の指導例—形式の指導, 内容の指導—	105
2.1. 形式の指導—テキスト構造の把握— 105	
2.2. 内容の指導—タイトルを考える— 109	
3. Post-reading 活動の指導例—要約の指導—	113
コラム⑥ 『裾を持ちなさい』	117
第7章 物語文の指導	119
1. 目標—「何ができるようになる」か—	119
2. 物語文の構造—「物語文法」—	122
3. 物語文の分析—「ごんぎつね」の例—	124
4. 物語文法の活用	126
コラム⑦ 『REX派遣—授業は日本語で行うことを基本とする—』	129
第8章 物語文を用いた指導の実際	131
1. 「概要を把握する」は「だいたい理解する」ということではない	131
2. 「調弦 (チューニング)」をする	133
3. 「勘所」を押さえる	138
4. 「勘所」を探る	143
コラム⑧ 『Visual Thinking Strategies (VTS)』	147
おわりに	149

第1章

「教材研究」とは何か

この章では、自分の学習経験や実際に行っている授業を振り返り、次の2つのことについて考えていきます。

1. 「教材の吟味」と「教材の解釈」そして「指導方法の検討」
2. 学習指導案の「単元観」「生徒観」「指導観」には何を書くのか
3. まとめ

Warm-up

中学生、高校生の時に受けた授業または自分が普段行っている授業を振り返り、1時間の主な指導の内容と流れを簡単にまとめてください。併せて、その指導の流れの中で教科書がどのように位置づけられていたかを考察してください。

1. 「教材の吟味」と「教材の解釈」そして「指導方法の検討」

教材研究とは、教科書教材を含む「教材の吟味」と「教材の解釈」、その単元を学習することによって生徒に身につけさせる「言語能力」をゴールとした「目標設定」、そしてその目標を達成させるための「指導方法の検討」のことです。

1.1. 「過去進行形」をどう指導するか？

ではまず「教材の吟味」と「教材の解釈」とはどのようなことを言うのか、中学校の教材を例に考えてみましょう。

教材：Lesson 7 “Wheelchair Basketball”, *NEW CROWN English Series*
I, pp.116-117. 三省堂

GET Part 2 マークがジンに電話をかけています。

Mark: I missed your phone call. What's up?

Jing: I had a problem with my homework, but I worked it out.

Mark: Sorry. I was at the sports center. I was playing wheelchair basketball.

Jing: Sounds like fun. How was it?

Mark: It was great. You can come next time.

Q & A Why did Mark miss Jing's phone call?

このパートの言語材料は次のように本文下に示されています。

POINT

I am watching TV now.

I **was watching** TV then. (nowとthenに注目して、2つの文を比べよう。)

このパートにおいては、本文中の“I was playing wheelchair basketball.”と、このパートで学習する基本文“I was watching TV then.”の「過去進行形」の習得がターゲットであることはすぐに分かります。すると、指導者はどうしてもそちらばかりに気を取られ、自分の学習経験をもとにして、おもに次のような指導手順を思い浮かべてしまうのではないのでしょうか。

- ① 「過去進行形」の形式の理解
- ② 教科書に示されているドリル練習
- ③ 説明された形式を用いた英作文
- ④ “What were you doing?”という問いかけに対して“I was ~ing.”と応答する会話練習

それでは、これらの指導手順だけで「過去進行形」の用法を「適切に」習得

することができるかどうかを考えてみましょう。

たしかに、「過去進行形」は既習事項である「現在進行形」の復習¹⁾から行えば、直前にbe動詞の過去形を学習していますので、文法規則の習得という側面から形式操作の手順を理解させることにさほど困難はないでしょうし、生徒にとってもそれほど大きな負担とはならないでしょう。しかしながら、「過去進行形」の形式操作の習得だけで適切な言語使用が期待できるのでしょうか。

ここが、「教材の吟味」への入り口となります。このことを分かりやすく理解するために、「外国語習得の大まかなプロセス」(根岸, 2014, pp.13-15)を紹介しておきます。根岸は次のように言語習得の段階を説明しています。

「外国語習得の大まかなプロセス」

1. わかる段階
2. 使える段階
3. 使う段階

「わかる段階」というのは、文法規則を理解する段階です。先ほどの例で言うと、「進行形」においてbe動詞の過去形を用いることで「過去進行形」の形を理解する段階です。次に、「使える段階」というのは、その規則通りに文法上正確な英文を作ることです。主語が複数であれば、be動詞はwereを用いるなどして規則を正しく運用する段階です。そして「使う段階」とは、そのようにして習得した技能(運用能力)を、使う目的や状況を自分で判断しその知識を引き出し活用して、話したり書いたりする段階です。

もちろん、第二言語習得の過程がこのようにあっさりと3等分され、境界がはっきりとしているわけではありませんが、「指導」と「言語活動」を考える視点に立てば、この概念は教材研究をする上で大きな役割を果たしてくれます。本書ではこの概念をもとに「発問」「評価の枠組み」などの整理も試みようと思えます。

さて、話を先ほどの「過去進行形」に戻します。

1) この教科書では、Lesson 5で「現在進行形」、Lesson 6で「過去形」、Lesson 7 (Part 1)で「be動詞の過去形」を扱っている。